

として盛んであって、夏から秋まで原料採取冬に製造して製品になるのだが、一年間の汗の賜物を捨てて来るのがしのびなくて家を出る時倉庫に山積みされて出荷するばかりの寒天を見納めにして来たそうだ。もう一つの話は当時十八歳であった四男の弟が軍属として南方方面へ向かったまま消息なしになっていたことは不憫だったとも話ししてくれた。

その後土木請負業の会社に就職いくらか明るさが見えはじめたが、ちょっとした風邪がもとで次男が小兒ぜんそくを煩う。春に一と月秋に一と月と毎年入院し、妻は入院中病院から通勤する親も子も苦しい年が五年程つづく。また四年間勤めた会社が倒産する。同業の会社三社程転々とする。五十三年最後に勤めた会社も倒産。この年行政書士の試験に合格したので開業する。妻は老後の生活を心配して厚生年金の受給年限まで頑張つて勤め通した。

現在私は厚生年金の期間が短いので通算老齢年金ではあるが、老人二人の生活には行政書士の収入があり、子供等は独立して各自自分の家を建て心配事が何一つない。

小さいながら自分の家を持ち、過ぎし日をふり返って見ると、生活の方法は誠に下手であったが恥じ入る生きざまだけはなかったことを自負する。

仏領印度支那崩壊と

ベトナム 越南国誕生の溪谷に彷徨す

東京都 土屋 米 吉

序

日本国が、ポツダム宣言を受諾した八月十五日後は、仏印駐在日本大使館員の外交権は停止された。又、フランス国政府代行者、インド支那総督は、過去七十年間行使してきた権能を、今日以降、行使できるか否かの重大問題を解決するために苦しんでいた。又、越南国は、九月二日に独立宣言はしたが、仏印在住日本人の生命財産を完全に保証する施策を実行する余力は見られなかった。このような情況下にあった在仏印日本人は深い溪谷で、出口を求めて右に左に彷徨していた。食糧、衣服、住居

等日常生活には苦労はなかったが、精神的苦悩は言語に絶し、特に戦時中、日本軍と関係を持っていた土屋等の苦悩は深かった。

八月十五日のラジオ放送

八月十五日、天皇陛下のお言葉が放送されるというので、早朝から溝口氏の萬和事務所（海軍関係の御用商社）で、ラジオを聞き続けた。「…忍び難きを…」というお言葉だけ明確で、ほとんど不明であった。集まる十人の日本人のそれぞれの聞き取ったお言葉を総合して、戦いに敗れた点だけは明瞭になった。そこを辞して宣安（ピン）省政府庁舎の前の土屋事務所に戻り、森田君（台湾出身者で、国民学校教師として仏印に派遣され、当時、土屋の秘書役をつとめていた。）や、安南人幹部と今後の問題について、協議をつづけた。

昭和四年、九州出身者として、台湾永住を希望し、台北帝国大学文政学部に入學した土屋は、台湾を起点として仏印で活動したいと思って昭和五年以来、現在まで心身をつくして仏印に残した歴史を、ここに雲散霧消せしめることに気づいた。残念、悲しい、何故か？どこに欠

くる所があったのか。神はいないのか。運命とは何か？等に自問自答をくりかえし、三日三晩、第三者から、夢遊病者とあやしまれるような生活におちいった。

最近、家族や友人から、仏印時代のことを書き残して欲しいといわれ、中でも長男は、話を録音しましょうとまでいってくれた。

私は、終戦時の仏印でのあの三日間の苦悩を思い浮べ、八十三歳という年齢を思い、長い人生の旅路の一こまを、のちに残す義務があるとも考えた。そのうえ、平和祈念事業基金の呼びかけがあったので、心を決めて、ペンをとることにしたのである。なお、現在私たち一家がカトリックの信仰に恵まれているのは、仏印のこの苦悩の三日間の賜物であることを思い感謝しないではいられない。

大日本帝国の連合軍に降伏の情報

八月十五日前に、安南人やフランス人の友人が来訪し、「日本軍は降伏するそうだね！」と問いかけた。それは、デマだときめつけたが、彼らは、四月二十日のヤルタ会谈、および七月十七日から、八月二日までのポツダム会

談の内容を知り、土屋に呼びかけていたのだった。彼らの警告を軽視したのはまったく、私の誤りであった。

八月十五日以後、われわれ日本人の身边は、急速度に転換して行った。夜になるとパンパンと発砲する音が耳に入る。翌朝、聞けば、将来に不安を抱く若い日本軍人の自殺した砲声であった。又、宣安（ビン）港にアメリカ軍上陸の情報も何度もくり返された。又、宣安（ビン）町（ハノイ市から南方約三百キロにある町、人口約一万人）付近に在住する日本人は全部銃殺されるという報道もあった。

日本人全部、特に日本軍と関係の深い土屋等の生命は、いつか必ず消滅させられる人びとが信ずるような情報がしきりに流された。

八月十五日の放送を聞いた時、天皇さえ御健在であれば、日本は再興できる。この仏印に同志と共にとどまっ
て、日本再興につくそうと土屋は固く誓ったのであった。しかし、この決意も無になるかと思うようになった。八月十五日後、時間の経過にともない、社会情勢は一変しつつあることに気づかされた。

仏領印度支那脱出の検討

仏印在住の日本人の生命財産を保護してきた日本政府の無力さを知り、仏印政府や新しい越南国政府の態度を知り、在留日本人の不安はつのるばかりであった。

けっきょく、日本人は、自分の力で自分の生命財産を確保せねばならぬことに気づいた。その頃の日本人は、いろいろな保身策をめぐらしていた。安南人の女性と同じ居していた友人は、「私は安南語を話し、子どももいるから安南人としてこの地に残ります。」と心中を洩らしてくれた。その時、私は彼を立派な日本人と思い、彼と、良き家庭を築こうとした安南人の妻も立派だと思った。

Hという軍人は、「私は、越南独立軍の指導者として迎えられている。彼らと協力して越南国を立派な国にするために努力します。」と言って土屋の手を固く握りしめた。その民族を越えた友情のぬくもりは、今の私の右手から消えていない。H君の鋭いしも温かいまなざしは永久にわたしの眼底に刻まれている。友人K君は私はチベットに行き、チベット国に生涯を捧げたい。チベットは中国の統治下にあるが、彼らは、仏教国として立派

な独立国たらんと努力している。私は、その考えを支持したいと思った。彼もぜひ同行してほしいと望まれた。二人は種々協議し、研究した結果、同行を決意し、取りあえず、所持していた現金を金塊や銀塊に替え、護身用ピストル二丁と弾丸数十発を準備した。

その時、越南国独立運動を進めてきた同志安南人カイ・キー君が来訪し、土屋が安南の地を去るのを見送ることはできない。米軍が上陸した場合は、カトリック神父の保護を求めてもらいたいと言われ、土屋をサドワイ修道院に案内したいと申し出られた。カイ・キー君は、夫婦円満、良き家庭人で、他の安南人の信望厚く、又、熱心なカトリック信者で、土屋の同志として、常に協力を惜しまれなかった。それで、とにかく、彼の申し出を受け入れ、神父様にお目にかかり、お言葉によって、態度を決することにした。

カイ・キー君の紹介によって、サドワイ修道院（修道院は、宣安町の北西約二十キロの地点にある。）をお訪ねして、心中を打ち明けると、神父様はお聞き下され、そのうえ、二DKぐらいの部屋に案内され、鍵まで下さっ

て、米軍の上陸で危険を感じた時は、利用するように、食事は、その時に相談しようと、ねんごろなお言葉をいただいた。

この修道院は、広い敷地内に、聖堂と黙想室、研究室、神父様の宿舍等があつて、一国の殿様の住むお城のような感じを受けた。付近一帯は、仏人所有のミカン畑のあるコンセッションで、広さは日本の郡ぐらいの広さで、そこにミカン畑をつくり、そのミカンを採取してハノイ、サイゴン、その他国外にサドワイミカンとして輸出し、経済的には恵まれた地域であつた。

その後、米軍は上陸せず、土屋もハノイ市に移住したので、その鍵は、一度も使わないで、神父様に深く感謝してお返し申しあげた。東京都中野区の徳田教会のフロジャック神父様に、このお話を申し上げた時、この修道院にフロジャック神父様もお住まいになられたことが、おありになると、うかがった。おもえば、土屋の生命が死に直面していた時、その死より救いあげて下さったカイ・キー君と、サドワイ修道院の神父様に対する湧きあがる感謝の思いかられて、昭和二十三年から、杉並区

下井草カトリック教会のダルクマン神父様に遇一度、公
教要理を御指導いただき、二年後の昭和二十五年の八月
十五日聖母被昇天の祝日に、家族揃って受洗のお恵みに
浴し、それから四十年、日々感謝に満ちた信仰生活を送
らせていただいている。

越南民主共和国の誕生

第二次世界大戦前の欧米人の中で、大日本帝国が壊滅
すれば、アジア地域の政治経済の体制は、二十世紀初頭
の欧米人を主体とした体制に復帰すると考えるものが多
かった。

尚、八月十五日前後の人びとで、仏印に進駐した仏国
軍や米国軍が、安南兵と戦い、安南にとどまることがで
きず、撤退すると考える者は少なかった。

仏印に居住する二千万の安南人は、仏印に常時、在住
した数万人の仏人から七十年間、いろいろな点を学んで
いた。又、日露戦争後クオン・テイ殿下（越南国独立運
動に一身を投じたお方で、昭和十四年以来十屋の師であっ
た。）を初め、多くの安南人は、明治維新後の日本及び
日本人の研究をつづけ、安南人の民族的自覚を叫びつづ

けていた。その結果、安南人は、越南国としての独立を
大人から子どもまで一致して希望していた。彼らは、い
ずれかの国と同盟し、自国の発展をはかろうとしていた
が、いずれか国に隷属することは、絶対に拒絶していた。
従って、越南国を支援するわれわれ日本人は、日本国と
越南国とが、なんらかの事項で、共同利益を求めめる点を
検討しながら、支援活動を行なっていたのであった。

終戦前後、越南国の独立運動を進める会派は仏国系、
日本系、国民政府系、中国共産党系、ソビエト系であっ
た。

仏国系は、フランスで勉強したバオダイ王（秘密裏に、
クオン・テイ殿下と連絡していた）を中心にした新仏安
南人に信頼をおいていた。しかし、フランス政府が、新
仏安南人と思いこんで仏印政府の官吏又軍人として盛ん
に活動していた安南人の中に、「仏国政府を裏切ること
が安南人に忠誠を尽くすことだ」という考え方を持つ安
南人もいた。この点は、八月十五日後、仏国軍が仏印か
ら撤退した行動が説明していると思う。

日本軍は、新仏家であったバオダイ王を中心にして形

成されていた順化（ユエ）市のバオタイ政府を信頼し、横山正幸氏（終戦後、土屋が受洗する時、代父の役をとめて下さった方）をこの政権の顧問として、越南国の独立を目標として活動していた。

日本側運動家は、越南国独立を支援するいろいろな施策を実行してきた。しかし、連合国本部の状況や、日本政府の最高意思決定に関する情報に接さなかった結果、日本軍の降伏と同時に越南国独立に関する施策の実行が不十分であった。八月十五日前、安南人同志が、ひそかに来訪し、情報によれば、降伏するそうだと土屋に聞きに来た時、彼らと十分に協議し、日本軍降伏の場合の越南国独立の施策を十分に研究し、万一に、もしそなえていたならば、越南の状況は、今日のそれとは大きく違っていたと思う。日本国降伏がとうてい信じられないとしても、デマとしないで、越南国の独立という条件のもとに、仮設として、考えればよかったと深く反省している。なお、われわれは、八月十五日の前に、研究不足であったと同時に八月十五日後、連合国側の心理作戦のとりこになり、仏印脱出を考え、右往左往したことは、まったく

武士道にもとるもので恥じ入るばかりである。

国民政府系は、広東市の陳希聖氏（クオン・デイ殿下に師事し、土屋と同志であった。）の系列に属し、日本系を去った活動家とホーチミン氏（クオン・デイ殿下の元同志、上海の越南復国同盟会設立に参加）系列で、今は別派として活動する安南人活動家を主体とし、広西省、雲南地区在住の安南人をもって編成した越南国独立運動団体であった。

中国共産党系、ソビエト系は、ホーチミン氏を中心とした安南人部隊だった。元來、ホーチミン氏は、クオン・デイ殿下の信頼を得、香港、上海等まで、越南独立の為に長い間戦ってきた勇士である。したがって独立運動にかかわる広い人脈を持ち、しかも、方法論も他の誰よりも多く経験を重ねられていた。

特に、日本軍降伏後、中国で訓練したゲリラ部隊としての資質を持つ安南人を多数仏印に配置したのは、中共系、ソビエト系の独立運動派が、他の会派より高い地位を占める結果となった大きな理由と思われる。

彼らは、九月二日、ハノイ市でベトナム民主共和国の

成立を宣言し、その数日後、ビン地区に、ベトミン兵約一個小隊が駐屯し、宣安（ビン）地区委員会の発会式を挙行した。開会式に土屋は招待され、祝辞を述べたが、おそらく、日本系同志が、土屋の淋しい気持ちを慰めて下さったものと、四十余年へた今も、この温かい同志の心に感謝しないではいられない。

終戦後、人びとの心が動揺している時、越南民主共和国の組織体に、各派の独立運動家は合流したが、その後、宣安地区委員会を始め、各地の組織体内に混乱が起きていた。しかし、越南国軍と米軍との戦争状態の時期は、越南側は、統一行動で進んでいたと、後日、友人が語ってくれた。

北部仏印居住日本人ハノイ市に集結

八月十五日後、日本からの報道は、原子爆弾関係のもの、鈴木貫太郎総理の辞職、連合軍司令官マッカーサー元帥の厚木飛行場到着、帝国憲法改正問題であって、まことに日本人として、不安の高まるばかりの報道が多かった。

組織的ゲリラ部隊の活動か否かは、現在では不明であ

るが、終戦後、日本人の所持品が略奪される事件が各地に起った。土屋は、よく遠くまで、安南人を訪問したが、何ごともなかったのに、自動車で外出した日本人が、途中で所持品を、時には、生命まで奪われるということも起きた。

このような情況の中で、北部仏印に居住するは日本人の河内（ハノイ）市集結が行なわれた。

河内（ハノイ）市モンブラン街に、十数人が楽に生活できる広さの家屋を借りて、土屋事務所を開設した。ビンの場合と同様に、安南人、日本人、フランス人、中国人、インド人等多くの来訪者があった。

その間に、これからのわれわれ日本人の生活並びに、今日まで活動を共にしてきた独立運動家たちの生活についての対策の検討がたがいに行なわれた。その場合も、仏印における日本政府や日本軍の無力であることが明白となり、われわれ日本人は、ロビンソン・クルーソーが、ある島に上陸した時と同じ環境であることを理解できた。

その頃、フランス人の友人が、北部仏印に駐留する約

一万人の仏軍部隊に、食料品を納入する業務を土屋事務所が引き受けるようにとの話を持ち込んできた。いろいろ研究の結果、古くからの先輩ルゼー氏と協同で、まず食事用のパンを納入することになった。(注、終戦後、焼野原のような東京に帰って、練馬区でチェリー製菓製パン店を経営したのは、この時のルゼー氏の助言にこたえたものであった。なお、その時、練馬区駐屯の自衛隊に大量のパンを納入していたが、ハノイ市でフランス軍隊にパンを納めた時の思い出への郷愁であったかも知れない。)

以上の時と前後して、ハノイ市の印度支那銀行支配人のバリエ氏が、雲南鉄道の経営に関し、土屋に意見を求めてこられた。鉄道に興味を持っていた土屋は、真剣に検討したのであった。

このモンブラン事務所には、いろいろな思い出がある。その第一は、当時、連合国軍の北部仏印の進駐部隊として、国民政府軍の盧漢將軍が、駐屯していた。その部長の劉大佐と交流していたが、ある時、わが部隊は、台湾に転戦することになったと語った。直ちに、私は、台

北市に居住する妻セツ子に手紙を書き、台湾を引き揚げる時は、九州の土屋村の兄の家に身を寄せるように連絡した。劉大佐は、海防(ハイフォン)から高尾港に上陸され、台南市に駐在されると、土屋が無事であるから安心するようにとねんごろな手紙を添えて妻セツ子に届けて下さった。妻は、蘇生の思いで、この大佐の御懇情に感謝し、幼児ら四人を連れて福岡県の土屋の故郷に引き揚げたのであった。

その後、劉大佐に拜眉の機会に恵まれず、長い年月を経ってしまったが、いつの日か、拜顔し、御礼を申しあげたいと願っている。

第二は、ある日、同宿のS君が、五カ国の国旗を求めて帰った。S君曰く、「われわれは、日本政府に何も求めることはできない。土屋事務所のお互いは、自立自衛しなくてはならない。しかし、もし、A国がこの街の統治者として君臨すれば、A国の国旗を掲げなければならぬ。B国がくればB国の国旗だよ：ハッハッハ」と笑いやがて黙ってしまい、沈黙はしばらくつづいた。敗戦国民の淋しさを互いに心の中で泣いたのである。

いずれにせよ、母国を滅亡させたものの子達が流浪の旅に出で立つその出陣式の場合、ハノイ市モンブラン街の土屋事務所であった。そして、その時、思い出したのが、母国を離れたユダヤ民族の方達が、レオンの山を忍びながら世界の随所で活動する姿であった。

フランス国籍の取得

長い間、親交のあったルゼー氏（夫人が安南人であった。）が、ある時、次のように語りかけられた。「連合軍は、日本の財閥を解体し、賠償工場以外は撤去すると聞いている。日本人は第一次産業に従事し、欧米人と対等の交流はできない。欧米人を呼ぶ時はサーという敬語を必要とする」と聞いている。土屋君が、そんな不利な立場に立つことは忍びない。永久に平等な立場で交流したい。それには、フランス国籍を持って欲しい。そしてフランス側には、ルゼーが申し出ていると申し立てをして下さった。

ルゼーさんのこの温かい思いやりの心の溢れた申し出に感激した土屋は、この申し出に従うことにし、ハノイ市にいた旧知の浦部領事に、ルゼー氏の話の内容を説明

し、フランス国籍取得に関する手続きを依頼した。ところが八月十五日以降、外国駐在の領事は、日本国を代表して署名する権能は、全部停止されている、とのことであった。したがって仏国籍取得の手続きは不能となり、土屋は現在も日本人である。

戦犯容疑者

昭和二十年十一月、突然、約三十人の中国人の兵士が土屋事務所を包囲し、安南人二人と日本人一人と土屋を検束した。なぜ、検束したかは後日明らかになった。

元来、越南国の独立運動を支持する日本国系列の集団は、土屋事務所の他に幾集団もあった。しかし、終戦直後、その集団の中心的人物であった日本人が、前述の土屋と同様、日本国降伏後の方策に関し、準備不十分であったので、結果において、日本系の安南人運動家は、不利な立場に追い込まれていた。

土屋がハノイ市モンブラン街に事務所を開設して以来、この事務所が、北部仏印における唯一の日本系の集団であるため、日本系の独立運動家が予想以上に多く、団体又は個人運動家としての連絡がよくできるようになった。

特に、日本側独立運動の中心にいた日本軍が無力となった結果、フランス側が、われわれに接近するようになったため、我々の運動は、多少具体的な社会形態をあらわすようになった。

以上の状況をみた日本系以外の会派の運動家達は、土屋のハノイにおける存在を好まず、われわれの検束に踏みきったと、思われる。安南人と日本人の三人はまもなく釈放された。土屋は、安南人の差し入れる食事をいただく、シャワーも浴び、散髪も自由に安南人に頼めるような個人住宅と変らない拘置所生活を送った。法廷に出るときだけ六人の銃を持つ軍人の監視下にあった。軍事裁判所では、戦犯容疑者として、難問題を問われ、電気椅子に掛けさせられたこともあった。しかし、結論としては、引き揚げ船で日本に帰るよう、仏印滞在は許さない、ということであった。そして、引き揚げ船リバーティールがハイフォン港を出航する五日前に、土屋は釈放された。拘置所内の約六か月間は、土屋の自由行動は禁じられたが、日常生活は平常通りであった。しかし、裁判所では、土屋の生命もここまでかと思慮した時もあった。も

し、盧漢將軍が、蒋介石總統の日本人に対する報怨以德の精神をもって、ことを進められなかったならば、土屋の生命もまっとうでなかったと思う。又、在印の日本軍司令部、日本大使館、日本人会の方々の温かい支援活動があつて初めて、現在の土屋の生命が存在するのだと思ひ、日々深く感謝している。

天と地の二つの世界

昭和十三年十月、仏印に派遣されてきた門松少佐が、「これから、日華和平運動を進めよう！、これは大宮様の御命令だ」、と土屋に指示された。当時、日本軍は、各地の戦鬪で勝利しているのに、どうして和平するのかと、その指示に一時反抗したが、各般の情況を知って、心から和平運動を進める決意ができた。

影左中佐の指揮下にある梅機関に協力し、重慶政府から脱出した汪精衛先生の日本渡航を支援する活動に、協力することができた。その結果、台湾軍司令部参謀部の申請で昭和十五年、勲六等瑞宝章を拝受した。その時土屋は藍衣社に、警戒するようにと注意されていた。生命の危険はこの時も身近に迫っていたのであった。

しかし、陸軍参謀部の最高責任者で、しかも、昭和天皇のお考えに最も近いお考えの閑院宮殿下（門松少佐は、仏印渡航まで、殿下の副官で殿下を大宮様と申されていた。）のお考えにしたがって活動することが日本の平和と繁栄に通じると信じて、和平活動に誇りと強い責任感を感じていた。

一八八二年、安南国順化（ユエ）市、院王朝の皇族として生れたクオン・デイ殿下は、一九〇六年来日し、一九三九年、上海で越南復国同盟会を設立した。（ベトナム国この時決まる）

一九三九年、東京世田ガ谷松原の南一雄宅（クオン・デイ殿下の仮庵）を訪問して以来土屋は、殿下の台北転任にお供をした。一九四〇年、土屋がハノイ市から同行のニエプ君等を殿下が指導し、塩島高級参謀、大塚事務官等と協議し、安南語の放送をNHK台北支局から開始した。

一九四〇年九月二十三日の日本軍の仏印平和進駐、一九四一年七月二十八日、日本軍の南部仏印進駐の折に、復国同盟会の積極的活動は見られなかったが、殿下は、

朝夕、家庭祭壇に祭る神仏に、越南国独立の日のきたらんことを熱心に祈っておられた。

汪精衛（兆銘）先生は、昭和十三年の日中両国の戦争のつづいている時、両国の交戦を中止し、両国の永遠の平和の実現のために重慶を脱出し、ハノイ市を経由して日本に渡ったのである。クオン・デイ殿下は、越南国が独立した後、今は敵国であるフランス国と国交を結び、世界各国と、平等の立場で交流したいと、土屋に、いつも真剣に語っておられた。

汪精衛先生とクオン・デイ殿下のお考えは、日本天皇の考え方である一視同仁、八紘一字の精神とまったく一致していた。

したがって、梅機関の和平運動も、越南復国同盟会の運動も、日本天皇の御聖旨が脈々として流れる運動であることを実感していた。その中私の運動は、ささやかではあったが、労苦を越えた、しかも、常に、重い責任を感じずる運動であった。

思えば、八月十五日から、昭和二十一年五月引き揚げ船で浦賀港に上陸するまでの日々は、一匹の動物が、安

全と食物と住む所を求めて苦勞するにも似た勞苦の連続であった。そこには、哲学もなく、人間の理想や温かい人と人との交流も忘れた生活の日々であった。

汪精衛先生やクオン・デイ殿下を中心とした活動が、天国における人間の営みであったとするならば、八月十五日から何日か間かの生活は、思い浮かべるだけでも悲しいものであった。現在、その生活を脱し、人間らしい生活を目標に日々、邁進できることを深く感謝している。